

「あまり知られていない 隣国・パラオ」

パラオ大使

貞岡 義幸

この連載では、外交の最前線Ⅱフロントラインで活動する外交官に、現地の様子を語っていただきます。今回は、太平洋諸島にあり、日本と歴史的に関係が深い国・パラオの大使が登場します。

パラオ、はどんな国？

パラオはフィリピンとグアムとの間に位置し、成田からの直行便で、4時間半で行ける国です。日本の最南端の領土である沖ノ鳥島とは九州パラオ海嶺でつながり、日本からは1400kmの距離です。数ある太平洋諸国の中でも日本に最も近い国で、時差はありません。私は高知県出身で、幼いころ、よく坂本龍馬像のある桂浜に行き「この

広い海の先にはどんな国があるがやろうか」と思っていました。半世紀近くたってようやく分かりました。

パラオの面積は屋久島と同じで、人口は2万人です。戦略的に重要な位置にあるため、日本に戦前から30年、米国に戦後50年統治され、1994年に独立しました。国土は自然に恵まれ、特にサンゴ礁に囲まれた青い海は世界中のダイバーが憧れる場所です。



さだおか よしゆき

1974年一橋大学卒業、外務省入省。内閣情報調査室次長、デトロイト総領事、埼玉大学事務局職員、国家公務員共済組合連合会監事を経て、2010年1月より現職。

人々の日々の生活では、酋長制度など昔からの伝統や習慣が色濃く残っていて、男女ごとの大酋長などの付き合いも私ども夫婦の重要な仕事です。大使館は、台湾、フィリピン、米国、日本の四つがあるのみです（注：パラオは台湾と「外交」関係を樹立していません）。信号機、本屋、映画館、ゴルフ場などはありません。

日本との関係

戦前、日本は、ミクロネシア地域を国際連盟下における委任統治領とし、パラオには地域全体を統括する南洋庁を設置していました（『山月記』などを



ODAによる日本・パラオ友好橋。パラオの大動脈となっている。

著した作家・中島敦も勤務してしました。

当時は「陸の満州鉄道」に対して、「海の生命線である南洋群島」と言われ、日本国民によく知られていました。第2次世界大戦中は、日米の激戦地となり、今なお7000柱のご遺骨が眠っていると言われています。

また、日常会話の中に日本語の単語

が800以上残っています(例えば、ベンジヨ、ゴメン、ダイジヨープ、ベントー、デンキなど)。

現在も、大陸棚延長問題、国連安保理改革問題、捕鯨問題など、多くの案件で日本と意見を共にしてくれる、非常にありがたい国です。

ちなみに、日本からも年間3万人の観光客が訪れ、長期滞在の日本人も300人います。

大使館の役割

日本大使館は1999年に設置され、臨時代理大使が常駐していましたが、今年より格上げとなり、私が初代の常駐大使として赴任しました。総領事館よりも小さな大使館で、人数も少ないのですが、スタッフ全員が多くの業務を張り切ってこなしています。私自身も、デスクワークに加え、「歩く広告塔」とばかりに、いろんな式典や会合

に顔を出しています(国内出張は、モーターボートを飛ばして行きます)。おかげで、紫外線が日本の7倍強いと言われるパラオなので、あつという間に日系パラオ人に間違われるほど色黒になりました。

大使としては、世代交代や援助供与国の多様化、中国の海洋進出が進む中、日本の存在感や国益を今後もどのように確保するかが最大の課題です。

最後に

このようにパラオは、地理的、歴史的に、日本と特別な関係にある親国です。

日本ーパラオ間は、年間80数回のJAL直行チャーター便に加え、2010年12月からはデルタ航空が成田から週4回の直行定期便をスタートする予定です。ダイバーでなくても、ぜひ一度お越しください。